
テンプレな転生モノ であります！

シセル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

テンプレな転生モノ であります！

【Nコード】

N5664X

【作者名】

シセル

【あらすじ】

「僕と契約してケロロ軍曹の世界に転生してよ！」

「わけがわからないよ」

なんかよく分からない内に死んだ。転生しろ？ふざけんじゃねえよ。

…で、何処に？え、ケロロ？前言撤回やらせていただきます。

いかんせん初投稿なんで拙い部分もあると思いますが、よろしくお願います。

プロローグ（前書き）

はじめまして、シセルです。

初投稿なんですが、生ぬるい目で見てくださいな。
ちよっとシリアスも入るので、よろしくです。

プロローグ

「マジですいませんでしたああああ!」

なんだろうこの状況。

なんか自称『神』がダイナミックな土下寝を披露している。
そもそも何故こんな事に…。

話はおよそ10分前に遡る…。

「イイイッヤツフウウ! ケロロまとめ買いだぜ!」

人が見たら10人中10人が振り向くようなハイテンションさで、
家への道を辿っていた俺。…女だよ?一応。俺っ子ですよはいそうです。

何故ハイテンションなのかと言うと、『ケロロ軍曹』のDVDが格安でB〇〇K〇FFで売ってたから、である。

「アニメも終わっちゃったし。オワコンでも気にしない、俺の中ではまだまだ行ける!」それにしてもこいつ、ノリノリである。

だから気付かなかった。上から突っ込んでくるへりに。

「キィ————ヤァ————!」

そして現在に至る。

「これは一体どういうことぞ?」

「いやあ、ちよつとへりで遊んでたら落ちたwww」

「落ちたwwwじゃねえよ? 殺すぞ? くびり殺すぞ? 何ならドザえもんにしてやってもいいよ?」

「サーセンそれだけはやめて下さい」

「お詫びは?」「え?」「だからお・詫・び。」

「…じゃあ転生s「やめろ」」

「…ネギですよ」「テンプレwww」

「ケロ」「キタ」——!それで良いですむしろそれが良いです」

「で、能力どうします?」「ガクブル

「うーんとね、?大軍曹10倍の力?隊長の素質?クルルさんをはるかに凌駕する頭脳?声帯模写　くらいでwww」

「…。」

「文句がぁありで?」「無いです」「よろしい」

「じゃあ、いつてらっしゃい(もう帰ってこないでくれ)」

「じゃあねっ!」

そしてケロロ介入の旅が始まるような気がしなくてもなくない。

ブローグ（後書き）

うわぁgggg。サーセン自己満足ですwww
次…？期待しないでね！

第一話（前書き）

やっと本編に入ります（）やっとではない
ではどうぞ。

第一話

くあらずじく

ケロロヒイイイヤアッフウウウ

どっかん

はいはいテンプレテンプレ

ケロロの世界に↑今ココ

あらずじおわり。

ということとで現在絶賛気絶中のルリリです。…え、ルリリって誰かって？オリ主の名前ですよはいそうです。作者ってセンスないねwww「何か言った？」ナンデモナイヨー

ってか何で気絶したはずなのに喋ってんだコレ。…アレ、気絶じゃないのか？なんだか暖かくて暗くて…MASAKA！？…わあへその緒ついてるー。

イヤイヤイヤマジですか。しかも男！？くっそあの自称『神』め…

くそのころの神く

「へっくし！…風邪かのお」

えーととりあえず、どうしようこの状況。というかケロン人ってへその緒有るのか…。あとルリリってもう親が決めたみたいダネー

それから一週間。

やる事がない

…そうだ、頭の中で計算でもしてみよう。えーと円周率とか…？

3.1415926535897932384626433832

7…なんか無限に続きそうだからやめとこう。

あれ？何か下の方から冷たい空気が入ってくるんですが。

まさか ついに ついにですかあああ！？

…3時間後…

「あー、うー、」（うつわー外に出れたー！おっしゃあああ！）

「ルリリ、カッコいい男になるんだぞ」

「うゝ…」（きめええええええええええwww）

つていうか出てくるのすつげえ苦しいんですけど。死ぬかと思った。
いい年して大号泣だももう。赤ちゃんが大号泣する気持ちが分かる
わあ…。

ピーンポーンパーンポーン。

「これより検査を行います。ラルル様、ルリリ様をお連れの上、第三検査室においで下さい」

ん？検査ってなんぞ。お？何か両親の顔が固くなったんですけど。

「…行きましょう」

「ああ、…出来れば無いといいな、素質」

「ええ…。」

あー素質の検査ですかさいですか。気合いでゴマカセナイかなー。
…ようしやってみよう。

ー検査中ー

誤魔化せたwwwマジでwww

あ、そういやー緑のケロン人さんに素質有ったみたいなさ噂で聞いた
んですけど。ケロロさんですよー！

これからどうしよう。素質隠すのは良いとして、この力とか頭脳とかフルに使ったらおそろしい事になって再検査くみたいな事になりそうなんだよなあ…。

テストとか体力検査で計算して全部平均にするとか？いいなそれwwどっかのめだか箱みたいでwwww

ということで次話は幼少期からです。

第二話（前書き）

今回もggdggdです。後簡単に主人公の外見説明をすると、目と頭のマーク以外全部白。目は赤。マークは栗マーク（黒）です。ではどうぞ。

第二話

今回は違う人からのサイドで始まります。
あと暴力シーン注意。

＼side??＼

「よろしく願いますね、少佐。」

部下に紙を渡されつつ、俺はその頼まれ事を引き受けた。まあ、タダじゃねーけどなあ…。クックク。あ？俺？俺はクルルだ、ケロン軍に所属している。まあまだ歳は二桁も行つてねえが。そんな俺様に頼み事とは珍しい。

「で、これを解読すれば良いんだよなあ？…つかこれなんだ？」

「これはですね、実はあの、息子の日記…なんです。」

息子の日記イ？なんだそりゃ。そう思い、クルルは渡された紙を広げた。

ペラリ「…？」

「…解読、出来ます？」

そこには、意味不明な数字の羅列。だが、子供の字とは思えないやけに機械的な文字だ。

「クッククク、まあ、やってみるさ。成功するとは限らねえけどなあ」

ピキッ。相手の顔に青筋が立った気がするが、無視、無視。

それから俺は、仕事の合間を縫って解読作業をするようになった。それから二週間後。

「大体解読できたか…。でもいいのかあ？これ、やべえなあ…。クツクツク…」

その内容はこうだ。

「○月×日、雨。

今日も子供らしく振舞う事が出来た…と、思う。というか何だか最近父さんの視線が痛い。ってか体も痛い。

無力な子供だからって、ストレスのはけ口にしないで欲しい。養成所の奴らから変な眼で見られるし。包帯してくにも限界があんだよ。母さんも殺されちまつたし、隠蔽工作だけはやけにうめえし。

親権が父さんにあるからな。殺されそう。

そついやぁ日記見られた。これとか見られたら色々やばいんですけど。まあこの暗号は最低レベルだから最悪解読されてもそこまで…。いや、結構困るわ。ケロン軍のクルル少佐あたりには二週間くらいで解読されそうだし。」

ここで終わっている。

（なんでこんなガキンチョ…でも俺様より一つ上かあ？が俺の名前なんて知ってたんだ…？っていうか虐待かよ、あいつもひでえ事するなあ…。まさかこのガキンチョ…ルリリつつたか、同類か？）

とりあえず依頼してきた奴に返しといた。顔面蒼白で、二倍の金渡ししてきたぜえ…。

「side out」

「side lili」

うわぁ、なんか久しぶりに日記見たら、見られた形跡が有るんですけど。コワー…。

ガチャリ。

「帰ったぞ。」

うつわぁ、帰ってきたぁ。

「おい、ルリリ、これはどういうことだ？」

そう言っ紙…コピー用紙を突き出してきた。

あw日記の内容www

「どういつことかと聞いているんだ！」
うっぜええええ。

「どういつことって、日記に位、好きな事書いていいじゃないか。
人に見せるわけでもないのに、何で駄目なの？父さん、何で俺の日記持ってるの？」

ガッ「五月蠅い、黙れっ！」「うッ」

蹴りを入れてきた。なんでだよ…。俺は正論を言ったまでなのに。

「大体、何でこんな！メンドクサイ、暗号で書いてるんだ！しかも
あの、クルル少佐に、ばれたんだぞ！？どうして、くれる！？」

会話の合間合間に容赦なく蹴ってくる。終いにはそこにある灰皿
まで振り上げる。それをギリギリで避けつつ、反論。

「ばれたって？別に。こつちにやむしろ好都合だよ！ぐッ、この地
獄から解放され、がつ、るならね、！」

あ、やっべ、この前の傷が開いた。包帯にじわあ、と血が滲む。

「お前なんて…生まれてこなきゃよかったのにつ…！」

…。さすがにそれは傷付くよ。涙が滲む。

父さんがもう一度灰皿を振り上げた、その時。

「そこまでだぜえ、ラリリ准尉さんよお。クックク。」
「こ…この子安ボイスは…っ！」

「なっ…！何故少佐が此処に…！？」

「今はそういう事言ってる場合じゃねえだろうがよ。第一アンタ何してんだあ？仮にも親だろうがよあ」
クルルさんマジかけー。テラ子安。

「少佐には関係ないでしょう…？」

「ガマ星雲第58番惑星ケロン星法 第75条。親は子供に危害を加えてはならない。また、危害を加えた場合、親権剥奪及び10年以下の懲役、又は一千万以下の罰金。軍に所属の場合、降格。忘れたのかあ？」
ココの法律。」

「…ッうわあああ…！」
「…！」
父さん…改め糞親父がクルル少佐に殴りかかろうとする。ガシッ。

「おい…待てよ…ッあ…。」

「お前、まだ喋れたのか…！大体お前は変な奴だ、自分は殴られても防御以外しねえくせに、ラルルに殴りかかると止めるしなあ、まあ結局死んだけどな。しかもタバコ押しつけたって三日後には跡形もなく消えてやがる。気持ち悪いんだよっ！」ガッ。

「がっは…！」ベシヤ

うわあ、やべえ、内臓破裂した。口から血が止まらない。でも糞野

郎から手は離さない。

「今の…内に、にげ…ゴホッ、ゲッホ、」

「心配ご無用だ」え？

バン！とドアが開いた。

「手を上げる！ラリリ准尉！」

「なっ…！」「殺人及び、殺人未遂の容疑で逮捕するっ！」

そして糞野郎は連れてかれた。

クルル少佐に抱えあげられる。

「っ…！」（ひでえなこりや、やけに軽い。一つ上だとは思えねえ軽さ、十分に栄養が取れてねえ証拠ってとこだ。しかも怪我もだ。骨折なんて生温い。戦場に行って帰ってきた戦士のほうがまだましだぜえ…？）

「おい、こいつを病院に運べ。今直ぐだ。」

「はい、分かりました。」

それを最後に、俺の意識は途絶えた。

be continued…。

to

第二話（後書き）

うわぁやっちゃったよ。クルルさん難しい…。

クルルさんはちなみに9歳です。原作開始が22才くらいだと思っ
ていただければ。

第三話（前書き）

おお！感想が来てる…！？

第三話、とりあえずまだ急展開が続きます。

いつも通りgdgdですが、（というかもう決まり文句みたいです
ね、これ）よろしくお願いします。

第三話

第三話です、どうぞ。

＼sideルリリ＼

「…？」

目を開けると、体に走る鈍い痛みと、視界に入る白い天井、照明。
（こんな時に言うセリフ、それは…！）
「…知らない天井だ…。」

「あんたは碇シンジかつつの」ぺしり

「痛つ…ク、ルル少、佐？」

そこは病院のベッドだった。左に顔を向けるとクルル少佐。

「ここは…」「ケロン軍御用達の病院だ。アンタは気を失ってここに運ばれた。」

「糞野郎は？」

「ク…ツクツクツク…、ちよいとばかりしOHANASHIしたら、全部吐いてくれたぜえ？アンタのおふくろの事もな。」

「お、OHANASHI…？」ダンスに夢中なんDA

「ああ、案外あつさりだったぜえ？…新薬の臨床実験も出来たしな…」
「いますつげえ不穏なセリフ聞こえたんですけど。怖いよ！？」

JOHANASHI

「うああああ！もうやめろおおおお！時、時がクル！あああああ、あれは憎しみの光あwse drftgyふじこ1p;」

「クッ
クッ
クッ
クッ
クッ」

～戻る～

「で、お前はこれからどうする?」

「どうするって…糞野郎が親権持つてるわけにもいかないし…」

「じゃあ、俺の知り合いでもいいか？」

「知り合い？」
「ガルルって奴だ。階級は中尉。」

そこでガルルさん！？マジですか……

「ちなみにもう決定事項だぜえ」

「はっ？」

プシュー。スライド式のドアが開いて、紫色のケロン人さんが入ってきた。

「お前の親権を預かる事になった、ガルル中尉だ。よろしく……と言
っておく。」

ええええええええええええええええええええええええ！？

「え、ちょ、まじですか！？つて痛たたたた」

「大マジだぜえ」「あまり喋るな、傷が開くぞ」

ということ、謎の先が見えない俺の軍人まっしぐらライフが始まるのであった。

第三話（後書き）

今回はちょい短いです。

次からは素質の事についてとか。

第四話（前書き）

感想がちよいちょい来てる…だど…？

今日は調子に乗ってまた更新です。明日学校…やめてください石投げないでください。では、gggggrry お願いします。

第四話

第四話。赤いのかも出てきます。
では、どうぞ。

♪sideリリ♪

とりあえず、病院を退院した。何でお前動けるんだとか聞かれても、このチートのせいでしょうどう考えても。

「これから俺の家に行く。親父の事や弟の事も紹介しておかなければいかんしな。」

そういつて家に電話を掛けた。どうやら俺の事をあちらのお父さんには説明してあるようだ。

「ほら、行くぞ。」

「あ、ハイ」

そうこうしているうちにガルルさんの家に着いた。

「帰ったぞ」「お邪魔します」

「そうじゃないだろう、ここはお前の家だ、『ただいま』じゃないのか？」

何か似たような事どっかの作戦部長様が言ってた気がする…気のせいだ気のせい

「…じゃあ、ただいま。」

ガラリ　どうやらこの家は引き戸らしい。

「ん…？」

玄関には、一、二、三…四足の靴がある。

「誰か来てるのか？」

「あ、兄ちゃん、お帰り。…そいつ誰だ？」
大体十三歳くらいだろうが、赤い肌にドクロマーク…

「紹介する。こいつは俺の弟のギロロだ。」
「つてかまだキズないんですね。」

「こんにちは、初めまして。こちらの家でお世話になる事になった、
ルリリと言います。よろしくお願いしますね。」
第一印象が大事大事。

「あ、ああ…。」
「ちよつとビックリしてるっぽい。」

「おーいどうしたんだー？」
「ま、まさか今の声は…」

「ちよつと待てケロロ！今行く！」
「ドタドタ…。あ、行っちゃった。」

「おい、ギロロ！…ったく…。」
その後、お父さんに面会。良い人そうだった。…目は釣り目だった
けども。

その後またギロロさんに会いに行ってみた。

「こんにちは…。」
「そろり
あ、赤と緑と青の頭が見える。」

「ん？誰でありますか？」

ケロロさんですね…ってか一番最初に気付くとは流石と言った所ですかね。

「え？誰？」

わぁド…ゼロロさんだ。あ、もうこの頃はマスクじゃないのね。って事はアサシンの修行中か…？うわぁ何か読心術使ってこようとしてますよこの人。まあ素質持ちにゃー効かないって事で、どすか。（…読めない…？）みたいな事考えてますねこの人。

「あ、お前さっきの…。」

「はい、ルリリです。」

「っていつか、その怪我はどうしたんでありますか？あ、我輩ケロロであります」

おぶうつ。痛いところ突いてくるねこの人。

「あー実は『カクカクシカジカ』って訳で」

「…へ、変な事を聞いてすまなかったな、ルリリ。」

いやそこはギロロさんが謝るところじゃ無いでしょうに。

「あ、紹介が遅れたね。僕はゼロロだよ。」

ほう、この時一人称は『僕』なのか。

「じゃあこいつも今日から我輩たちと一緒にいいでありますか？二人共」

え？

「まあ話も聞いちゃったわけだし、なあ？」

「うん」

「じゃあ決定！」ま、マジか。

「ちなみに歳は？」「6歳です」

「そうか、じゃあこれからよろしくな。」

「は、はあ…。」

「sideガルル」

どうにか歳は違うが友達？のようなものは出来たようだ。

これからこちらの養成所に移ってもらうから、とりあえず編入テストを受けさせる事にしよう。

「side out」

「数日後」

「今日は編入テストを受けてもらう。お前の実力次第ではもしかしたらもしかするとギロ口達と同じくらいの学年に入れるかもな。」

「はー、編入テストねえ…。どれどれ…？」

『射撃』『筆記テスト』『面接』『再検査』

ちよつと待て？再検査？…まだ素質の事ガルルさんに言って無いwww

まあ当たって砕けるですね、分かります。イヤ、砕けちゃいかんか。

次はテストからです。

第四話（後書き）

なんかggdggd…。

そのうち黒いのも出す予定です。

改：2011・10・28

第五話（前書き）

盛大に風邪をひきました…OTZ
でも更新します。風邪を治す暇があつたら投稿ですww
リア友にアドレスを聞かれている！でも言わない。（え
では、どうぞ。

第五話

第五話…！まさかここまで思いつきが發展するとは…。
ではどうぞッ！

『射撃』『筆記テスト』『面接』『再検査』。

射撃は多分チートだから大丈夫として、筆記テスト。まあ先輩の教科書（大体大学位まで）斜め読みしたから…多分…大丈夫だきつと。

面接…は建前でガツガチに固めときゃいいか。一応言葉のボギヤブラリーは多い方だつて自覚はしてるしな。

問題は再検査ですよ。

軍の狗とか嫌なんすけど。某鋼の兄弟みたいな人じゃないのよ俺。

まあなんとかなるさー精神で行こうか（・ω・）

side教官

今日、ちよつと訳ありで入ってくる生徒がいる。

確か中等部二年の素質持ちと知り合いたとか。あと、最近ガルル中尉と一緒に住んでいるらしい。

『面接』の意味を知らないらしいのだが、教えておいた方がよいの
だろうか…。

side out

sideギロロ

「おいギロロ。」

ケロロが声を掛けてきた。今は丁度昼休みだ。

「今日ルリリの編入テストがあるらしいからさ、見にいかね!？」
 そうか、ルリリのか…。あいつからは何か不思議な雰囲気がある。
 安心と恐怖が入り混じったような、そんな危ない? 雰囲気だ。気にな
 るな…。

「あ、じゃあ僕も行くよ。午後の授業、今日は無いんだし。ゼロ口も行くのか…。」

「ああ、じゃあ俺も行く」

まさかあんな事になるとは、この時は予想もつかなかったが。

午後

「おー、結構人が居るであります…」

「大抵は暇で見に来た人たちだろうね」

「さあ、どうなるか見ようじゃないか。」

Sideルリ

とりあえず筆記テスト終了。俺より一学年上の問題だったから、楽勝だった。

教官が驚いてた。何か後から何枚かやらされたけど、端っこの方に「大学卒業レベル」とか書いてあったのはスルースルー。

次は射撃……ほとんど当たってた。初めて銃を触った事を伝えると、教官が目え剥いてましたよ。

で、後は面接と再検査……「面接ってどんな？」ってガルルさんに聞くと、「模擬戦」

[illegible]

「それ面接じゃないですよね!？」

「ケロン軍の面接と言ったら、模擬戦だ」
マジですか。

ドアを開けると、四方を壁に囲まれた部屋だった。5mくらい上にガラスが張ってある。あ、ギロ口さん達だ。…ん？クルル何故ここに。

「模擬戦ヲ開始シマス。部屋ノ中央ニタツテ下サイ。」

部屋の中央…ここらへんか。

「準備はいいか？」お、ガルルさん。

「いいですよー。始めて下さい。」

そして、模擬戦が始まった。

第五話（後書き）

今日は平日なんでこんくらいです、すんません…；
では、また！

第六話

第六話

「模擬戦、開始」

そう聞こえた瞬間、キルルの何か（以下キルルロボ）が襲いかかってきた。

（…ッ、速いつ！）

キルルロボはルリリの予想の範疇を超える速さだった。

だが何かがおかしい。

（…何かおかしいな、level1ってのはこんなに速いのか！？）
sideガルル

「ガルル中尉！」

「何だ？」

「level1ロボに異常発生です！levelが…最高level110に設定されていますッ！」

その報告にガルルは戦慄した。

「どういつ事だ！？」
シュンッ

「…クルル少佐」

ドアの方にはクルルが居た。

「残念ながら、性質の悪いヤツに入りこまれちゃったようだぜえ、
クゝックックック」

「性質の悪い…？」

「反ケロン軍の奴らの事だ」

反ケロン軍。そもそも組織というものには必ず反対意見も付いて来る。しかしそれが過激化すると、デモ、テロ等が起こったりする。反ケロン軍とはいわゆるそういう集まりである。

「なるほど、サイバーテロか…。」

「で？どうするんだよ、どうやら通信もあっちゃからしか出来ねえみたいだな、電子ロックも掛けられてるしなあ、ガラスを割って中に入るのも、ここのガラスは超強化ガラスなんだろ？C-4（プラスチック爆薬）使う訳にもいかねえ…八方塞がりだな、どうすんだアゝゝゝックック」

どうやらこちらからの介入は無理らしい。

「…どうにか出来ないのか…？」

「もうどうにか出来ちゃってみたいだぜエ？」

ガルルはモニターを見て刮目かつもくした。

何故ならそこには——地に倒れ伏したキルルロボと、無傷のルリリが立っていたから、である。

n
u
e
d
...
。

t
o
b
e
c
o
n
t
i

第七話（前書き）

平日だけと投稿しますwww

ggggdrry

…よろしく願います。

第七話

第七話

地に倒れたキルルロボと、表情の見えないルリリ。

「どついう事だ…？」

その光景を見たガルルが呟いた一言だった。

「あのー、もういいですかねえ？」

ルリリが顔を上げた。

「っッ…！」

ルリリが顔を上げた瞬間。少しだけ、前の表情の面影が見えた。そこには、

殺してやる。

殺気と憎悪。

憤怒と激情。

そして——圧倒的な恐怖。

が、一瞬垣間見えた。数瞬で元の表情に戻ったが。

（1分前：sideルリリ）

キルルロボが再びルリリに襲いかかる。

（間違いない、こいつはlevel1なんかじゃない——。という事は、暴走？いや、見た所正常に動作している…。という事は…ハッキングでも受けたか？level10を出して、本部を混乱させる為に——。）

襲いかかるロボを紙一重で躲す。

「流石は本部のロボ、性能が段違いだな」

ちなみに過去、ガラクタで戦闘用ロボを作成した事があるルリリだが、「まったく手ごたえがない」状態だったらしい。

（でもまあ、面倒臭いし、どうせ後の検査で素質がバレたら軍に入るんだし。）

（殺っちゃうか）

キルルロボの手を掴み、引き千切る。

そしてそのまま蹴り飛ばし、壁に激突したロボを追撃。

「えーい」やけに気の抜ける掛け声で踵落としを繰り返して、撃沈。この間三秒。

「……………」

ギャラリー、完全に沈黙。

続く。

第七話（後書き）

平日なんでちょっとです。
では！

第八話（前書き）

うわぁ2か月放置とかないわぁ
っというところでggggですが。

第八話

前回のあらすじ

（。Д；）何アイツコワッ

あらすじおわり。

＼sideガルル＼

「あのー、もう戻っても良いですかねー？」

そういうといきなり謎のハンカチのような物を取り出し、ズボッ

「！？」

手をつ突っ込んだ。

「確かここらへんに…有った」

ずるり、と黒いノートPCを引っ張り出した。

「おいおい、ありやあケロン軍でもまだ試作品段階の薄型異次元収納装置じゃねえのかあ？」

「クルル少佐、それは本当か？」

「この俺様が言っただぜえ？まあまだアレは俺にも作れっこねえがなあ、クッククククク」

そんな会話をしていると、下から声が聞こえてきた。

「これでそつちからの回線が繋がったはずですよ」

「！…！…いつの間に」

「俺の三つつ下か…部下にしちまうかあ？」

＼sideルリリ＼

ちよつと前に開発した薄型異次元収納装置。案外役に立ったな。

「あざっしたー」

そう言っただけで部屋から出た。すると、

「ルリリってすっげーな！」

（僕（俺）より強いかも）

と考えたり賞賛したりする三人組と

「（。Д。）」「↑こんなギャラリーが居た。

と、そこへガルルが。

「あ、ガルル中尉」

「合格だ」

「へ？」

「手続きする、ついてこい」

キングクリムゾン中…

何だかんだ言って面接も終わったし、あとは一応検査だけする事に。

「…で、何でここに居るんですか二人とも」

「仕事だ」「興味が有るからだぜえ、クーっクックック」

「ちよつと機械調整するんで、30分ほど待っててもらえます？」

検査官の人が放送で言った。

「じゃあまた30分後に」

そう言って部屋を出る。そして近くの長椅子に座った。

「どうしよう、隠そうかな…何か眠いな」

強烈な眠気。それに従って俺は目を閉じた。

「何処か」

「ん？ここは…」

目を覚ますと何か異様な既視感がある真っ白な空間に。

「目えさめたー？」

そこには真っ白なあの神様が居た。今更だが容姿の説明。よう、よである。以上。

「で、今更よう…ゲフン神様が何の用だ」

「今確実に何か言おうとしたでしょう…まあいいです、それですね、まず男にしてみましたので修正します」

「はい？」

「プラス神様から上司に『お詫びで転生させたのに何でこんな事になってるんだ』とお叱りを受けたため能力の追加です」

「…はい？え、ちょ、待って待って」

「待ちませんw…えーと、シキの魔眼と、刀語の見取り稽古と、あと、異常と過負荷と、何が良いかな」

「うええええええええい！ちよつとオオオオオオオ！？チートも体外にだよオ！？」

「あとアクセラレータでオツケーですね！」

「もう言う言葉が見つからないっていうか、んなに能力持ってたらくロン軍に目エ付けられ「え？知らないんですか？もう付けられますよ？」（。D）」

「じゃあ、頑張ってくださいね！黄金率も上げましたし、死の線防止用の眼鏡も一応ありますから」
ひゅっ、と穴が下に開いた。

「うわ何そのチートおおおおおおおおお……」

「ハッ」

目が覚めた。…女になってるよちくしょおおおおおおおおお！？

でも体型はあまり変わって無いからばれることあるかないか？ちよつと声高いかもだけど。

アクセラレータ…使えますね！そもそも演算できるからね！凄いチートうわあ。

それにしても気持ちの悪い視界だなあ、線が入ってるし。

試してみるか？

えーつと確かここに…あつた、定規。まず大嘔吐きで痛みを無かつた事にして…

手に付いている死の線をなぞる。…カメラも無効化しておこう
べちゃ ドサッ

…『気持ち悪い』なんか』『付いちゃってるなあ…オールフィクシ
ョン使った時だけか。

落ちた腕を無かった事にして、検査に向かう。

またキンクリしますん。

検査官の人は女の人だ。良かった。一応女だしな。

「えーと、ルリリ…くんじゃないわね？ちゃんよね？絶対」

何この人鋭い。おかしいよこの人！？

「資料では男になってるけど…ナイショにしててあげるわ。」

「あ、有難うございまふっ！…噛んじやった…」

（なにこの子可愛い）

「そういえば失礼ながらお名前は…？」

「ん？ああまだ言って無かったわね、ガルル小隊のプルル看護長よ
うわあマジか。原作キャラバンバン出てくるなあ

「えーと、これを付けてくれる？」

なんだかよく分からないが、検査開始だ。

解析中…

「ルリリちゃんは隊長の素質って知ってる？」

「知ってますよ？どうしたんですか？」

「持ってる人知ってる？」

「ケロロさんと俺です」

「え？」

ピーピーピー、解析終了。素質持ち確定、最高レベル、解析不能。
繰り返シマス。解析不能…

バアンツ！

「たっ、多々たたった多々大変よガルル中尉いいいい！」

「プ、プルル看護長！？どうした！？」

「る、ルリリちゃん解析不能なのよ！素質持ってるのよ！最高レベ

ルなのよなにこれそれなに千年に一人の逸材よあああ！？ケロロ
くんと自分が素質持ちだって知ってたのよ夫おおお！」

「お、落ち付け看護長！」

5分後。

「つ、つつまり整理して話すとつ、

・素質持ち

・千年に一人の逸材

・自分が素質持ちだと知っていた

・ケロロが素質持ちなのも知っている

つてことよ！」

「素質…？」

「クルル少佐、素質と言うのはな、ケロンスターを持つ事が許され
る物の事だ、絶対命令という逆らう事が出来ない物も出せる」

「…つつーか、何でちゃんなんだ？看護長はシヨタコンだったのか
あゝ？クッククックク」

「あら、ルリリちゃんは女の子よ？…あ」

Bannon!

「プルルさあああん！？言わないでつて言いましたよね俺！」

「…いや、嘘だ、きつと嘘だぜえゝ…ウソだろお？」

「女…の子…？」

なんやかんやで一騒動。ここで一旦切りますん

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5664x/>

テンプレな転生モノ であります！

2012年1月14日18時48分発行